

中国 三十年 に思う

田畠光永
tabata mitsunaga



今、これを書いているのはまだ冬のさなかだが、この一文が読者の皆さんにお目にかかるのは五月半ばということだから、北京は白い綿のような柳絮の飛ぶ春も終わって、初夏を迎えていたはずだ。今年は夏にオリンピックが開かれるから、その最後の準備で、街に慌ただしさを見せる北京の様子がテレビな

どで流されるたびに、最近、私は自分が暮らした三十年ほど前のあの街のたたずまいをよく思い出す。

私が駐在特派員として赴任したのは、一九七七年の八月末のことであった。夜の北京空港は雨あがりで爽やかだった。

灯りの乏しい空港ビルで入国手続きしたのだが、支局の備品として携帯したVTRの再

生機について、いくら説明しても空港の係官に理解してもらえなかつた。結局、梱包を解いて中身を見せたのだが、そもそもVTRの再生機なるものについてまったく知識がないのだから、それでもわかつてはもらえず、しかし、武器などの危険物ではなさそうだということだけは納得してもらつて、やっと空港を出たことを覚えている。

当時の中国は、毛沢東主席が亡くなつてまだ一年足らずの、國中が革命、革命と叫んだ文化大革命の余燼がくすぶっていたところで、東京から北京への四時間ほどの飛行機の旅は別世界へのそれを意味した。

街はもちろん、人民服と自転車の世界。外国人はまだ珍しく、好奇の目にさらされるのを覚悟して外出しなければならなかつた。文化大革命の十年で中国経済は崩壊寸前のところにまで追い込まれたと、後に総括されたが、確かに人々の生活は貧しかつた。

日本からの旅行者は夕食の後、よく夜の街へ繰り出したがるのだが、当時の北京は外でお酒を飲むところもなく、ましてやそれ以上の遊び場などはどこにもなかつた。「北京には朝と昼と夕方と深夜しかないので」と、るる説明しておとなしくホテルの部屋にお引き取りを願うしかなかつた。

その七七年の夏、晩年の毛沢東に疎まれて失脚していた鄧小平が復活したのだが、その

年の秋から空気が変わり始めた。それまで京劇といえば、「革命現代京劇」と名づけられた新作ものしか上演されなかつたのに、十月一日の国慶節に古典京劇が上演され、それを鄧小平以下の指導者たちがそろつて見物するという形で、「世の中変わるぞ」と人々に印象づけた。

●三つの三十年

「世の中変わるぞ」といえば、今年はちょうど中華人民共和国建国六十年目にあたる。

そしてこの六十年は、前と後の三十年ずつにくつきりと分かれる。一九四九年の建国から七八年までと、七九年から二〇〇八年の今年までである。さらにつけ加えれば、その前も一九一九年の「五四運動」から建国まで、ちょうど二三十年である。

この二つの「三十年」は、それぞれまったく性格が違う。最初の三十年は、日本の横暴に抗議する学生たちの「五四運動」が始まつて、中国が「半封建・半植民地」といわれた状態から抜け出すために、もがき苦しんだ年月であつた。それは、軍閥割拠に終止符を打つための「北伐戦争」、国民党による共産党への「包囲討伐」、兩党が統一戦線を組んだ「抗日戦争」、その後、さらにまた兩党の「内戦」と、戦火の絶えない三十年であつた。

最後の勝利者となつた毛沢東率いる共産党政権は、誕生と同時にソ連を盟主とする社会

主義陣営の一員として、アメリカをはじめとする西側諸国と敵対するべく運命づけられていた。そこから二つ目の三十年が始まる。長年の戦火で疲弊した国を再建するには、ソ連の援助に頼らざるをえなかつたが、それはソ連の手駒として、その対米、対西側戦略に従属することを意味した。毛沢東はそれを潔しとしなかつた。同時に彼は、党官僚が牛耳るソ連の硬直した社会体制にも批判を強めていた。

そこから毛沢東の「自力更生」路線が始ま

る。アメリカとは敵対し、ソ連の援助は来ない。その中で国を豊かにするためには、国民のやる気にものを言わせるしかない。毛沢東が晩年の二十年、反右派闘争から文化大革命までつづきつづきと政治運動を発動したのには、さまざまな側面があるが、そこを貫くものは人民大衆の上に君臨する党官僚や専門家や学者たちの権威をはぎ落とし、大衆の積極性と創意工夫を十分に引き出そうという戦略である。

鄧小平は決断した。後れた中国がいくら自分で意気込んでいたが、外の世界の進んだものを取り入れるしかない。復活から一年余り、七八年末に彼は革命の時代の終わりと「改革・開放」路線への転換を明らかにした。三つ目の三十年の始まりであつた。

これには一九二一年、手に無一物の数十人が集まつて結成した中国共産党が、三十年足らずでの広い中国全土を掌握したという歴史の裏打ちがあつた。共産党的勝利はまさに人民大衆の勝利であり、大衆を動員し、組織し、犠牲をいとわず戦わせることに成功した毛沢東たちの勝利であつた。

しかし、革命では成功したこの「人民戦略」は建設では成功しなかつた。革命後の「革命的政治運動」は人間関係を破壊し、生産を破壊し、多くの悲劇を生んだ。国家建設という実務には、専門家の知識と技術と統制が必要であった。とりわけ技術がなければ、意欲だけではどうにもならない。五〇年代末、大衆が鉄を作るというかけ声のもと全国で繰り広げられた「土法製鉄」運動の悲喜劇は、革命と建設の違いをすでに明らかにしていたのだった。

私が北京で暮らし始めた七七年、人々は人民服と自転車の三十年間変わらぬ生活の中で、一体この先どうすればいいのか、思いあぐねていた。そこへ復活してきた鄧小平が、「世の中変わるぞ」という合図を発したのである。人々の期待は高まつた。

鄧小平は決断した。後れた中国がいくら自分で意気込んでいたが、外の世界の進んだものを取り入れるしかない。復活から一年余り、七八年末に彼は革命の時代の終わりと「改革・開放」路線への転換を明らかにした。三つ目の三十年の始まりであつた。

經濟特区を設け、外国資本を呼び込んで土地と労働者を提供する。一昔前、「新植民地主義」と共産主義者が非難した手段だが、台湾や韓国はそれで成功していた。鄧小平はその後を追うのをためらわなかつた。外国の資

本邦が中国人を搾取して儲けたいなら儲けさせればいい。資本も技術もない、そして多くの国民には仕事もない、そんな中国が豊かになるためにはほかに方法はないではないか。

国内に向けての、「豊かになれるものは先に豊かになつてよろしい」という「先富論」

は、それまでの共産中国、革命中国の看板とは正反対の方針だった。個人企業が認められ、

次は人數制限つきで人を雇うことが認められ、やがてその制限もなくなり、今では中国经济を動かしているのは外資企業と私営企業であると言つていい。國中を覆つていた統制経済の網はどんどん小さくなり、今では完全な市場経済国家である。

もちろん、この路線も順風満帆というわけではなかつた。金儲けに狂奔する党员官僚、一向に進まない民主化などに学生や市民の不満が高まつた。それが爆発したのが、一九八九年春の民主化運動であつた。鄧小平はそれを銃火と戦車で押さえつけた。「六四天安門事件」である。

鄧小平はそれをより一層の「改革・開放」、とりわけ「開放」で乗り切つた。九〇年代前半、外資に開放する業種を広げ、地域を広げた。外資は戻つて来た。中国は「世界の工場」へ向けて疾走した。

北京、上海といった大都市はいわゞもがな、

今、ちょっとした地方都市にも高層ビルが林立し、マイカーが渋滞を起こし、外国有名ブランド店が看板を掲げる。三十年前、税関の職員もVTR再生機を知らなかつたのが、今では白物家電では世界一だし、ITでは中国メーカーがアメリカの老舗IBMを買収、サブプライム・ローン問題で大損したアメリカの大手証券会社に中国国家ファンドが十%近い資本参加をするまでになつた。

GDP総量ではおそらく今年、中国はドイツを抜いて、アメリカ、日本に次ぐ世界第三位の座を占めることになる。人口が巨大だから、一人当たりではまだまだ低位だが、それでも今や経済大国であることは間違いない。

毛沢東の三十年に比べて、鄧小平路線の三十年はなんと赫々たる成果を収めたことか。

● 経済大国の代償

昨年（二〇〇七年）十月、中国共产党は第十七回党大会を開いた。中国はいまだに共产党の一党独裁体制を続けているから、五年に一度の党大会が最高の政策決定機関である。党大会では、トップである胡錦涛總書記が五年前の実績を報告し、今後五年間の基本路線を明らかにした。

実績については、五年続けて二桁の経済成長を成し遂げたことを中心に、農業に対する課税を廃止したこと、軍人を二十万人削減したことなどを謳いあげ、今後の目標としては

「小康社会」「和谐社会」（両方で安定した、バランスの取れた社会を意味する）の建設を掲げ、具体的には二〇二〇年に一人当たりのGDPを二〇〇〇年の四倍にすることを打ち出した。二〇〇〇年の一人当たりのGDPは約八千元であつたから、二〇二〇年にはそれを三万二千元（現在の一元＝約十五円で計算すれば、約四十八万円）にするという明確な数値目標である。

一方で、胡錦涛は今の中国が多くの「困難と問題」に直面していることも認めている。

列挙すれば、経済成長に対する資源、環境面でのコストが高すぎる、都市と地方の発展が不均衡である、農業の安定的発展と農民の収入を増やすことが困難である、就業・社会保障・収入の分配などに問題がある、党員幹部の仕事ぶりに形式主義、官僚主義、贅沢などが目立つ、消極腐敗現象がひどい、などである。

私流にこれをさらにまとめれば、環境、格差、腐敗である。どれも深刻な問題であるが、胡錦涛が真っ先に挙げた経済成長の環境面での代償が、とりわけ深刻である。つきつめて言えば、水の問題である。

もともと中国は水の少ない国柄である。昔から南船北馬と言うように、華南は比較的水に恵まれているが、華北は降水量が少なく水不足である。国全体の水資源量を一人当たり

にすると、世界平均の四分の一しかない。約七百の大中都市のうち、半分以上の四百都市が慢性的な水不足状態にあり、さらにそのうち百を超える都市は、よりひどいとされる。

中国の水資源は量が少ない上に経済発展にともなつて汚染がひどい。一〇〇五年末、東北地方を流れる松花江が、沿岸の化学工場の事故でベンゼンに汚染され、大都市ハルビンが一時、飲料水が絶たれた。汚染のひどい河川としては、黄河と長江の中間を流れる淮河や広東省を流れる珠江がかねて有名だが、松花江の後も重慶、湖南、広東の各地で工場の事故による汚染が相次ぎ、二〇〇七年五月には江蘇省の名勝、太湖に大量のアオコが発生して水が飲めなくなり、無錫市の住民が大量脱出するという事態にまで至つた。

生産工場は大量の水を必要とする。言うなれば、原材料に人手と水とエネルギーを注ぎ込むのが工場である。人手とエネルギーはよそから買うことができるが、水は今のところ輸入することはできない。水は人間にとつても工業にとつてもかけがえがない。

今年の初め、中国産の冷凍ギヨーザの包装に農薬が混入されていて大騒ぎになつたが、私はその報道を見ていてあれほどたくさんの冷凍食品が中国から輸入されていることに驚いた。冷凍ギヨーザを作るにしても野菜を洗い、肉を処理し、小麦を捏ねて皮を作る、そ

のどの工程にも水が要る。冷凍ギヨーザを輸出することは、なけなしの水を輸出することでもある。ほかの工業製品にしても同様である。

そして、概して発展段階の低い工業製品ほど水を大量に消費する。工業化の過程を最後にスタートした中国には、そういう生産工場が多い。日本は中国から加工済み冷凍食品を大量に買っているが、その逆の事態が起きるとは今のこところ考えにくい。

要するに問題は、今のような経済発展の道を歩み続けるのに、中国の自然条件は耐えられるのかということである。水の問題が典型的だが、中国の自然は地球上でも人間の生存にきびしいほうに属する。したがつて、人間と自然のバランスが崩れる日が来るとすれば、それは全世界いつせいに來るのではなく、まず、中国のような条件のところから始まるだろう。

毛沢東は、彼の置かれた条件から国民の精神を革命化して、やる気を引き出すことで国を富ませようとした。それはそれでやむをえない選択であつたが、革命戦争時代の手法は平時の建設には通用せず、またやる気だけではどうにもならない問題の前に挫折した。

鄧小平は、その反省のうえに立つて「改革・開放」路線を歩み、ともかく中国を経済大国の地位にまで押し上げた。その功績は大きい

けれど、今や毛沢東時代とは違つた制約条件、中国の自然がその路線の行く手に立ちはだかろうとしている。そこを乗り越える道筋はまだ見えない。

おりから世界経済全体もアメリカのサブプライム・ローン問題をきっかけに、これまでの「開かれた貿易・投資体制」の行き詰まりが露呈しつつある。アメリカの過大消費が、世界各国のドルに対する信仰的信任をよりどころに世界の需給ギャップを埋める形で矛盾を覆い隠してきた構造が、持続の限界に達したようになる。

中国は老大国である。老文明大国と言つてもいい。欧米の産業革命以来の工業化、商品経済化の波は、たかだか三百五十年くらいの歴史しかない。さまざまな歴史的要因から中国はその波に最後にとび乗つた形だが、自然を破壊し、人間に従わせるという工業化路線の根源的矛盾に最初に突き当たる国となるのではないか。

次に進むべき道の具体的姿は見えないけれど、それが自然との共生を求めるものでなければならぬことははつきりしている。古来、さまざまな思想を生み出した中国の、ここ一番の思想的営みを見守りたい。

（たばた みつなが・ジャーナリスト、元神奈川大学教授
著書に『鄧小平の遺産』岩波書店）